

成医会講習所設立の頃

大 滝 紀 雄

明治十四年一月セント・トーマス病院医学校から帰朝後間もない高木兼寛は、京橋区鎗屋町十一番地に東京医学会社を発会させた。同年五月一日、同会社の一部を借りて、内務省の医師試験を旨指す医学生徒数十名のために、夜間医学校を設立し、成医会講習所と称した。この日が慈恵医大創立記念日となっている。慈恵医大設立に当っては、英医学との関係ならびに海軍との関係が最重要であるのはいうまでもないことである。第一点の英医学との関係は、東大を中心としたドイツ医学採用が決定し、日本の医学教育がドイツ医学に向いている中で、慈恵を始めごく一部の医学校だけが英医学を採用した点が注目に値する。第二点の海軍との関係だが、明治三年兵部省管下に高輪御殿山に海軍病院が設置された。明治四年七月には、兵部省内に海陸軍軍医寮がそれぞれ開設され、五年二月には陸軍省、海軍

省が別個に誕生することになる。日本の海軍は英国式を採用、慈恵の医学も英国式すなわち海軍式によった。

戸塚文海は明治五年、初代の海軍軍医大監(総監)となつた。明治十六年には高木兼寛が戸塚に代わり、第二代目の軍医総監(海軍省医務局長)となった。久志本氏を中心に書かれた「慈恵医大百年史」には、成医会創立当時の高木兼寛、戸塚文海と勝海舟の関係が描かれている。海舟と文海は長崎伝習所時代の同志であり、勝家の主治医は杉田玄端と戸塚文海の二人であった。橋本綱常、高木兼寛、ベルツらは必要に応じて勝家の診療をしていた。「海舟日記」にもみられる通り、海舟の長男小鹿はアナポリス兵学校を卒業後帰国、於栄と結婚するが、於栄も小鹿も結核にかかり、屢々文海の往診を必要とした。

成医会講習所創立直前の明治十四年四月、文海は海舟に三、〇〇〇円の借金を申し込んだ。当時としては最高級の文海の月給三〇〇円と比較すると決して少ない額ではない。しかし、実際に借りた金は同年五月十九日、講習所創立後、一、五〇〇円だけのようである。この一、五〇〇円は五年後の明治十九年三月と六月の二回に分けて七五〇円

づつ完済された。明治十五年八月に有志共立東京病院が開かれ、十六年九月に芝愛宕町に同院が移転した後であった。

「松山棟庵先生伝」にもみられる通り、成医会講習所が設立された頃、高木兼寛、松山棟庵、隈川宗悦、戸塚文海の四名がそれぞれ一、〇〇〇円宛、他の三十数名の有志が三〇円ないし五〇〇円を分に応じて醸金し、第一回の申し込み金が二一、五一〇円と記されている。但しこれは申し込み金であつて果たしてどれだけの金が集つたかは不明である。「慈大百年史」には十五年八月施療病院開設に当つては、当時の外務卿井上馨を通じて、各国公使館筋の協力を得、民間の醸金約四、〇〇〇円で始められたと記されている。十六年五月には宮内省から恩召金六、〇〇〇円が下賜された。十七年には鹿鳴館でわが国最初のバザーが開催され純益金が薬代として寄付された。十八年十一月のバザーはさらに大がかりで、皇后陛下の行啓を仰ぎ、その益金一四、八六四円がこの施療病院へ寄付された。

金録関係からみただけでも、私立医学校や施療病院を作ることが、当時如何に困難であつたかがうかがえる。

エルウィン・ベルツと温泉医学

安井 広

E・ベルツは一八八〇年(明治13)七月に内務省中央衛生会から『日本鉱泉論』を出版した。この本につき『中央衛生会第一次年報』に「委員ドクトルベルツ管テ相豆上州ノ鉱泉ヲ経歴シ、其泉質及改良法ヲ論ジ一書ヲ著シ、之ヲ本会ニ出ス。即チ翻訳シテ日本鉱泉論ト名ク」とある。本書の刊行される前月、一八八〇年六月にベルツは温泉に関する建白書を提出しているが、その翻訳が本書である旨『ベルツの日記』に書かれている。その内容は日本には数多くの温泉があつて療養に利用されているが、これを指導する機関がない。政府は含密分析場を設け、現地に医師を常任させて患者に温泉治療を指導さすべきであると説き、さらに温泉地に至る道路の改修、療養患者のための必要施設にも言及している。

(横浜市)

藤浪剛一によると一八七九年(明治12)「内務省ハベルツ